

# 平成25年度教師海外研修(ガーナ) 研修報告書

学校名	安城市立里町小学校	氏名	服部 郁子
-----	-----------	----	-------

## 1. 印象に残る写真2点

### ●「思ったよりも重い!!歩くのも無理!!」



アコラマーケットで出会ったおばさんが、頭の上に持っていたバナナを載せてくれた。人でごったがえすマーケットの中をこのスタイルですいすいと歩く人々に感動。ガーナ人のスタイルがいいのは、きっとこのため?

### ●「ガーナ人の日本語の先生に出会う」



メアリー・スター・オブ・ザ・シー・国際学校の日本語の先生は今から40年以上も前に刈谷に住んでいたと聞いてびっくり。帰国後も、ずっと日本語を教え続けているそうだ。日本人は、勤勉で意志力があ素晴らしいとほめてくださったが、ご自身こそ勤勉、実直な方と感動した。

## 2. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

### (特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

現地研修の目的は、ガーナと日本の未来についてリアリティーをもって考えられるような題材を見つけることであった。以前、国際理解に取り組んだ時、子どもたちは、なんとなく自分たちが上で、かわいそうだから何かしてあげたいという気持ちが先に立っていたような気がする。現実を知り、隣人に接するような気持ちで、他の国の人のことも考えられる子どもになってほしい、そのためにどんな教材を用意してどんな取り組みをしたらよいかを探るため、私自身が現地をよく知りたいと思った。「貧しい国」、「宗教の違う人たち」、「教育を十分に受けられない子どもがいる国」といった印象をもっていましたが、今回ガーナを訪問して、日本と経済面で様々に繋がって国であり、穏やかで真面目な国民性であると分かった。「貧しくても幸せに生きている」、「わ

た私たちと同じように一生懸命勉強したり働いていたりしている」、「日本とはいろんなところで繋がっている」という事実がつかめる実物資料や写真など多くのものを収集したり、学んだりすることができた。これらを効果的に使いながら、私自身の口から語ることによって、ガーナやガーナ人を身近に考えていくことができるようにしたい。

### 3. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど）

#### （1）柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

ガーナの人々の暮らしを垣間見て、人間同士の繋がりの濃さを感じた。日本であれば、個人の店で買い物をする際にも、一言も話さなくても買ってしまうこともある。しかし、ガーナでは、まず値切ることから始まり、値段を交渉する能力も試された。私自身は値切ることが初めての体験だった。最初は「面倒だな・・・」、「買い物一つにこんなに時間がかかるの?」、「お店によって値段が違うの?おかしい。」などと考えていたが、最後の方は、「まけてください。」と言えるようになった。よく考えれば、自分が子どもの頃は、近くのお店で大人たちの間で交わされていた会話や光景である。

ガーナでは、買物一つとってもコミュニケーションなしでは生活できない。しかし、これこそが本当の生きる力ではないかと思った。値段の交渉など生活に根付いた営みのなかでコミュニケーション能力を自然に身につけていくのではないだろうか。コミュニケーションや人間関係の大切さに気づかされた今回のガーナ訪問であった。

#### （2）柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

ガーナと日本とのつながりを感じたのは、まず、JICAの方々の活躍ぶりからであった。JICAという組織で、多くの日本人が生き生きと活躍しているのを間近に見ることができたのは、感動であった。青年海外協力隊の方だけでも60人以上もいるということを知り、本当に驚いた。ビジネスではなく、ボランティア活動で働くことに多くの若者が使命感をもっていることは素晴らしいと思う。

また、カカオの生産について伊藤忠商事のガーナ事務所長さんから講義を受けた際、日本は、ガーナから重要で大切な輸出相手国としてSteady BuyerあるいはLoyal Buyerと呼ばれ、カカオ豆の約80パーセントをガーナから輸入していることを知り、両国の人々の間に深い信頼関係があると感じた。日本とガーナの両国には、自分さえよければよいという身勝手さはなく、信頼関係を大切にしている国民性があり、お互いの国がWin-Winの関係になれるよう相手の国の事情を考えて取引をしているのだと思い、両国の関係を誇らしく思った。また、だからこそ、板チョコの値段が、100円前後で、何十年も前から売られ、私たちの身近なおやつでありえたのだと、改めてガーナとのつながりの深さを感じるとともに、親近感を覚えた。

#### （3）柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

ガーナで言えば、カカオ豆やバナナなどは、いつでも植えられて繰り返し生産できて、現金に結びつきやすい農産物であるが、それらは、環境に影響されやすいものだ。日本でも、ウナギやマグロなど海産資源をどんどん取っているが、環境の変化や乱獲によって、その数は減り続けている。地球温暖化や公害といった環境問題は、時として国境を越え、世代をこえ、世界規模で影響がある場合も多く、共通の課題だと思う。

開発途上国においては、地球温暖化よりも今日の糧の方が大事というのはよく言われることだ。しかし、地球の代わりはない。このかけがえのない地球に責任をもつことは、私たち地球人の使命であろう。そうした価値観は、国が違って、文化が違って、人種が違って、宗教が違って、人類共通のものだといえる。しかし、教育の中で学ぶ機会がなくては、そうした価値観は育たない。教育の中でこうした価値観を養っていくことも共通の課題であろう。

#### 4. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

JICAの青年海外協力隊の方が、現地の言葉を話し、現地の受け入れ先の人々が用意した住宅に住んで、本当に現地に溶け込んで仕事をしているのが印象的であった。また、JICA 専門家の方々も、自分たちがいなくなった後も、ガーナの人が、自立して自分たちでその仕事をしていけるように、計画的にまた忍耐強く協力的に事業を展開していた。自分たちに都合のよい援助ではなく、ガーナの将来のことを考えた活動は本当にすばらしい。JICAの仕事の一部しか見ていないが、どの職員の方もガーナの未来を考え真摯な態度で現地の人々に接しておられると感じた。そうした地道で粘り強い努力の結果、青年海外協力隊のみなさんは現地の人に信頼され、受け入れられているということが良く分かった。また、ガーナの人たちは、こうした日本人を通じて、日本を見ていると思う。ガーナに入っている青年海外協力隊の人数が減っているとのことだが、これからも、もっと多くのガーナ人が日本人を知り好きになってくれるよう、引き続き青年海外協力隊の活躍を期待したい。

#### 5. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

持ち物で持って行ってよかったものは、計量計。スーツケースや荷物の重さを量るのにとても役立った。でも、チームに一つあれば十分。予防接種は早めに計画を立てるといいとよい。私は、マラリアも心配だったので、予防薬マラロンを処方してもらい持参した。少し高いが、副作用が少ないので、飲んでいけば安心。そのため、虫よけスプレーなどはほとんど使用しなかった。ただ、他の蚊に刺されたりするのを避けるために、部屋に置く電池式の蚊取り線香や腕時計型の虫よけは使用した。

自分の学校や家族を紹介する写真や名刺などは、話の話題として興味をもってもらうために便利だった。ラミネートしておくで見せやすいし、回覧したりできるのでよかった。できれば、写真に何の写真かわかるように英語でコメントを入れておくとよい。

#### 6. その他全般を通じての感想・意見など

今回の研修では、ガーナのことを学びつつ、日本のことについて考えさせられた。人間関係が密接なガーナは、人と人との関わり大切さを私に思い起こさせてくれた。また、子どもが大人の仕事や生活をよく見ているので、様々な道徳観などが親からあるいは大人から子どもによく伝わっていると思った。たとえば、人のものを盗んだりすると、周りから制裁を受けるそうだ。日本でも、昔は地域の中で、いろいろなしきたりがあった。お互い様といった考え方や譲り合いの心など、昔は教えなくても当たり前にあった。そうした道徳心を、日本は、失くしてきたのではないだろうか。無論、昔も今も変わらない日本のよいところもある。たとえば、時間を守る、先を身通すなど時間管理は誇ってよいところだろう。しかし、効率のよさだけを追求してきたことの結果が現代日本の希薄な人間関係だとすれば、何のための効率だったのかということになる。日本の行く

末をそして世界の行く末を、今こそ日本人の見通す力で、考えていくことが大事なのではないかと強く感じた。

以上